

グローバル化時代における大学の英語教育について

On the Importance of University English Education in the Age of Globalization

海老沢 達 郎
Ebisawa Tatsuo

1. はじめに

近年、日本企業は工場を海外に移転させ¹⁾、また、海外の企業を買収したりして、グローバル化を進めている。海外の企業との競争に勝ち抜くために、グローバルに活躍できる人材を国内外でも求めている。大学も世界の大学に対応できるように学期制を改め、海外からの優秀な学生の獲得に熱心である。同時に、グローバルに活躍できる人材を育成するために、多くの学生を海外の大学に留学させる目標を掲げている大学もある。例えば、6カ月を海外の大学に留学することを義務づけている大学（学部）もあり、また、大学の授業は英語で行われている大学も現れた。大学のグローバル化は時代の要請と言っても過言ではないだろう。筆者は、獨協大学で主に、メディア英語、ビジネス英語関係の授業を担当している。大学の英語教育における「話す能力」については、誰もがその重要性を認めているので、本稿では、今までの筆者の体験を通して、グローバル化にとって非常に重要であると考えている大学の英語教育における「英語を読む・書く能力」の重要性について論じてみたい。

2. 英語を読む・書く能力重視の原点について

最初に、およそ30年前に筆者が大学の英語教育で「英語を読む・書く能力」を重視して行った授業を紹介することから始めることにする。30年前のことなので正確を期するために、1980年代に、数年間に亘って「日米経済関係」について始めた授業の一つを、「テーマ中心の時事英語教育」として『英語教育』（1986）に掲載したものを一部引用しながら、説明することにする。1980年代は、日本の経済成長が著しく、世界第2位の経済大国（現在は中国に抜かれ第3位）となり、“Japan as No.1”²⁾と言われた時代である。日米間で貿易摩擦が起こり、Japan Bashing 等の記事がメディアに溢れていた時代でも

1) 1985年9月22日、米国ニューヨークのプラザホテルで開かれたG5（日・米・英・仏・旧西独の先進五カ国蔵相・中央銀行総裁会議）で、米国の貿易赤字を緩和させるため、ドル高を是正することを認めた。会議がプラザホテルで開かれたため、プラザ合意と呼ばれている。当時、円ドル為替レートは1ドル240円前後であったが、1988年の初めには1ドル120円前後となり、約2倍の円高となった。その後、円高ドル安が急速に進み、2011年には戦後最高値となる1ドル75円32銭にまで達した。このプラザ合意が、日本企業が工場を海外に移転させる契機となった。

2) 1979年のEzra F. Vogelの著書 *Japan as Number One: Lessons for America* が語源。

あった³⁾。そうした時代を背景にした、青山学院大学経営学部の英語講読Ⅲ（通年）の授業を紹介する。講義内容は下記の通りである。

「①科目の名称：英語講読Ⅲ ②科目の性格：専門科目，必修 ③対象年次：3年 ④履修者数：31名（うち女子3名）⑤教材：海老沢達郎著『英字新聞の読み方』（桐原書店），米国政府発行のOfficial Text（公式文書）から抜粋したコピー，*The Japan Times*（4回分），VOA放送のテープ ⑥目標：幅広い英語力の養成と英語を通して政治，経済，文化等を含めた国際的な知識を身につけること。同時に，経営学専攻の学生であることを考慮して『日米経済関係について』というテーマで専門的研究方法を身につけること」⁴⁾

英字新聞を読んだことがある学生が殆どいなかったため，まず，テキストの『英字新聞の読み方』を使用して，Headlineの原則，Headlineと記事の中に頻出する用語，ニュース記事の構成及びその特徴等の英字新聞を読む上での基本について講義した。次に，メインテーマの「日米経済関係」の問題に入った。米国政府発行のOfficial Textを使用して，1982年から1984年までの米国政府要人のスピーチから，当時の大統領，国務長官，通商代表，大統領補佐官の日米経済関係に関する発言部分を抜粋したものをプリントし，テキストとして使用した。これらのスピーチを読むことにより，過去3年間の日米経済関係について詳しく学ぶことができた。研究する上で，過去のことを勉強することの大切さも教えた。それ以前の日米経済関係については，筆者が説明した。更に，当時の日米関係の現状を学ぶために，駐日アメリカ大使と国務次官補のスピーチを詳しく読み，これにより，日米経済関係の過去，現在，未来についての問題点を勉強したことになる。

初めは，語彙力が乏しかったため，経済問題を扱った英文に，学生たちは相当苦勞した。これは，英字新聞で使用される語彙が，学生が学んでいる英語の語彙よりも難しく，また馴染みのない語彙が使用されていることも一因であった。しかし，経営学専攻の学生であるため，“budget deficit, twin deficits, debt crisis, direct investment, credit, distribution, mortgage rate, zero-sum game”と言った専門用語が出てきても戸惑うことはなかったようである。現在の日米経済関係から見れば，TPP（Trans-Pacific Partnership）talks を扱った授業と言えらるだろう。この間，*TIME*, *NEWSWEEK*, *The Japan Times* 等を使用して関連記事及びアメリカと日本の文化の相違などを講義した。学生たちは，日本の新聞で日米経済摩擦に関する記事は読んでおり，ある程度は理解していたが，授業を通して米国側の日米経済摩擦についての考え方

3) *TIME* 誌1985年10月7日号の表紙はTRADE WARSとあり，中央に，日本からの輸入品をストップという意味で右手を差し出したUncle Samの格好をした人物の写真。1985年11月11日号の表紙は，A Day in the Life of Japan Special Photo Essayとあり，日本特集となっている。更に，1986年11月24日号の表紙では，PACIFIC RIVALRY New Focus for the Superpowersの文字が。1987年4月13日号では，TRADE WARS The U.S. Gets Tough with Japanとあり，その下に，太った日本人力士とUncle Samが戦いを始めようとしている絵を載せている。また，1988年7月4日号の表紙では，SUPER JAPAN Can an economic giant become a global power? とあり，中央に旭日旗が描かれている。1988年8月8日号では，Yen Power とあり，日本人ビジネスマンの写真が大きく掲載されている。いずれも，*TIME* アジア版ではあるが，このように日本関係の記事が特集となっているのは，当時の日米経済関係をよく表しているものと思う。日本ではtrade friction（貿易摩擦）という言葉が使用されているのに対し，アメリカではtrade wars（貿易戦争）を使用しているが，これは，日米間のパーセプション・ギャップを表している。

4) 海老沢達郎，1986。「時事英語教育法⑮ テーマ中心の時事英語教育」『英語教育』第35巻第3号40頁。

を初めて理解した。

また、学生たちは、「米国政府の日本に対する態度に関し、日本を持ち上げたり（下記①参照）、数字をあげて理論的に要求したり（②）、また、いわゆる威しをかける（③）といった米国側のスピーチの巧みさに、学生たちは感心し、最後にはスピーチ・コミュニケーションの分野まで、話は広がっていった」⁵⁾ ということまでも勉強し、知識を広げていった。

- ① “the U.S.-Japan partnership is the most important bilateral relationship in the world, bar none.”
- ② “Japanese manufactured goods have become a pervasive part of the American marketplace—100 percent of videotape recorders sold in the United States, 70 percent of 64-K RAM semiconductors, 23 percent of autos, and the list goes on.”
- ③ “We *demand* no more, ladies and gentlemen. From this day forward it will be for Japan to determine what is in its own self-interest. We will, if asked, *advise*. We will, if asked, *consult*. We will *not demand*.”⁶⁾

最終的に、学生を数人ずつのグループに分け、自動車問題、農産物問題等について興味を抱いた問題について学年末に英語でレポート（論文集とした）を作成させた。対象クラスの学生は、前述したように英語専攻の学生ではなく、経営学部学生であり、選択科目ではなく必修科目であった。そのため、比較的英語ができる学生もいれば、苦手な学生もいたので、英語の間違ひはあったとしても、外国人が英文レポートを読んで理解できる英文作成を目的とした。即ち、コミュニケーションの手段としての英語の利用が、この英文レポート作成の狙いであった。このようにして、当時の政治・経済に関する英文記事を読み、それを英文でレポートを作成するという授業を、およそ30年前に行い、「英語を読む・書く能力」重視の授業を実践した。当時、英字新聞は、「新聞の英語は文学作品と比べて、はるかに見劣りがする。そういう英文を読んでも、本当の英語の実力はつかない。新聞などは自分で勉強すればよい」⁷⁾ という偏見があり、誤解に満ち溢れていた。現在とは正反対の状況であった。しかし、筆者は英字新聞を読むということは、「外国の権威あるジャーナリストや学者が執筆した高い水準の記事を、雑誌と同じように味読することができる。世界の出来事を知るといことは、複眼的思考法を身につけることになり、国際理解にとって不可欠である」⁸⁾ という考えから、この時、英字新聞を含めた英語メディアを工夫して使用した授業は、最も国際化⁹⁾ にふさわしい授業の一つと確信した。現代では、これに英語による発表と質疑応答を加えれば、グローバル化にふさわしい授業と言えるのではなかろうか。

同様に、同じ頃、大学の英語教育における「英語を読む・書く能力」重視の授業を、獨協大学外国語学部英語学科の2年次必修科目の英作文（通年）で行い、英字新聞を作成した。前期（春学期に相当）は、

5) 海老沢達郎。1986。「時事英語教育法⑮ テーマ中心の時事英語教育」『英語教育』第35巻第3号41頁。

6) 同上、41頁より孫引き。

7) 海老沢達郎。1986。「時事英語教育法⑮ テーマ中心の時事英語教育」『英語教育』第35巻第3号40頁。

8) 海老沢達郎。1997。「特集 時事英語は楽しい！ 日本の英字新聞活用法」『時事英語研究』第52巻第1号12頁。

9) 当時、国際化という言葉が広く使用されていた時代である。大学でも、国際政治経済学部、国際関係学部、国際文化学部というように「国際」という言葉が流行した。

前述した大学の授業と同様に英字新聞の読み方等の基本を講義し、後期（秋学期に相当）に、同じように学生をグループに分け、政治、経済、スポーツ、文化等で関心を持ったものを英文記事にしていくという作業を行い、*The Soka Times* という英字新聞（新聞と言ってもプリント）を発行した。ただ、当時は、パソコンが一般に普及していない時代で、筆者自らが電動タイプライターを使用し、新聞のレイアウト及び英文校閲までも担当した。教員にとっては、大変負担のかかる授業であった。この授業とは別に、25年前の英語学科2年次の時、筆者の英作文の授業を受けた学生は、卒業の年の4月から民放テレビの「CNNヘッドライン」のキャスターに抜擢された。獨協大学同窓会報のインタビューに、キャスターの仕事を実際にやってみた感想は？と聞かれ、「番組のトップ項目の見出しを自分で考えるのですが、その時、時事英語や海老沢先生の英作文の講義で教わったことがとても役にたっています」¹⁰⁾と答えている。このように、英文で新聞記事を読み、英文で記事を書くという「英語を読む・書く能力」重視の授業を獨協大学でも実施したが、それなりの成果はあったと確信している。青山学院大学と獨協大学でのこの二つの授業が筆者の大学英語教育における「英語を読む・書く能力」重視の原点となった。

3. グローバル化について

3.1 グローバル化とは

大学の入学案内の新聞広告を見ると、「グローバル社会を生きぬくための人材を育成」、「スーパーグローバル大学」ように、グローバルという言葉で溢れている。では、グローバルとはどういう意味であろうか。グローバル (global) を辞書で調べてみると、「地球上の、全世界の、世界的規模の」¹¹⁾とある。次に、グローバル化 (globalization) を同様に辞書で調べてみると、「(金融・企業などの) 国際化」¹²⁾、「(市場・企業などの) 国際化, 世界化, グローバル化」¹³⁾とあり、経済に密接に関係のある言葉のように説明している。

次に、グローバル化 (グローバリゼーション) の定義について論じてみたい。Andrew Jones (2006) によれば、「最も一般的に言えば、グローバリゼーションは社会のすべての側面で国際的な結びつきや関係性が進んだことと定義できる」¹⁴⁾としている。また、「多くの一般論者にとってグローバリゼーションは、なにより地球規模での資本主義自由市場経済の発展であり、それはこれまでにない国境を越えた経済活動と結びついたものである。しかしながら学術的にはそれは正確な使い方とはいえないだろう。グローバリゼーションは、現代の世界において様々な社会生活の側面、すなわち文化や技術、情報、環境、政治の変化にあてはまるのである」¹⁵⁾と述べている。このように、Andrew Jones は一般的な定義と

10) 『獨協大学同窓会報』1993年6月10日。「メディア英語」は、当時は「時事英語」という名称であった。

11) 研究社新英和大辞典

12) ランダムハウス英和大辞典

13) ジーニアス英和大辞典

14) 佐々木てる (監訳), 穂山新, 明戸隆浩, 大井由紀, 新倉貴仁 (訳). 2012. 『グローバリゼーション事典—地域社会を読み解く手引き』4頁. 東京: 明石書店 (Andrew Jones. 2006. *DICTIONARY OF GLOBALIZATION*).

15) 同上

学術的な定義に分けて説明している。また、Andrew Jonesは、「グローバリゼーションは今や多くの文脈で、あらゆる人々に適当に使用されているため、この現象にあてはまる問題が多様で混乱している。アカデミックな観点からグローバリゼーションを研究するには、その状況は好ましいものではない。学術刊行物や本屋の棚はこの用語を含んだタイトルであふれている」¹⁶⁾とも述べている。大学入学案内での先の新聞広告の例はまさに、Andrew Jonesの意見に該当すると思われるし、一般の人が日常的に使用する言葉となっていることも事実である。グローバル化の定義については色々議論がなされ、意見も色々あるが、本稿では、グローバル化を「経済的側面だけでなく、社会のすべての側面での国際的な結びつき」と定義することにする。また、「グローバル化」という言葉が、いつごろから学会にとどまらず一般的にも使用されるようになったことについても諸説があるが、1980年代、もしくは1990年代に急速に広まっていったと考えるのが一般的であろう。

3.2 大学のグローバル化とは

2015年5月現在で、全国の国公私立大学（短大除く）の数は779校¹⁷⁾に達している。また、大学進学率が5割を超えている一方で、私大の4割が定員割れを起こしているのも事実である。これは少子化の影響で、18歳人口の減少が続いているからである。こうした現状を考えると、私見ではあるが、今後、大学は「グローバル化に向けた大学」と看護師、介護士、保育士、旅行業務取扱管理者、コンピューター関連、簿記等の資格を取得して社会に出てすぐに役立つ実学を目指した「非グローバル化の大学」、「その中間に属する大学」に大別されるのではなかろうか。

文部科学省は、日本人の留学生を2020年までに12万人へ倍増させ、外国人留学生についても、2020年までに30万人に倍増させることを目指している。更に、文部科学省はグローバル人材育成に向けた取り組みの強化として、「グローバル化が加速する中で、日本人としてのアイデンティティや日本の文化に対する深い理解を前提として、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、異文化理解の精神等を身に付けて様々な分野で活躍できるグローバル人材の育成が重要である」¹⁸⁾という基本的な考えを掲げ、大学のグローバル化に向けての国の姿勢を表している。

大学も一般入学試験でTOEFLなど英語の外部試験を利用し始めている。政府の教育再生実行会議が、2013年5月、グローバル化への対応として、「読む」能力だけに偏らず、「聞く」「話す」「書く」能力も測るTOEFL等の外部試験の活用を提言した。また、文部科学省の、「豊かな語学力」を身に付け、グローバル化に対処したいという英語教育の考えから、大学は外部試験の利用を始めたのであろう。文部科学省によると、2013年に34校が一般入学試験で外部試験を利用した。

教育の面でも、グローバル化を目指した対策が始まっている。東京大学の教育が目指す人材像について、江川雅子(2014)は、「その中で特に力を入れているのが、『よりグローバルに、よりタフに』とい

16) 佐々木てる(監訳)、穂山新、明戸隆浩、大井由紀、新倉貴仁(訳)。2012。『グローバリゼーション事典—地域社会を読み解く手引き』4頁。東京：明石書店(Andrew Jones. 2006. *DICTIONARY OF GLOBALIZATION*)。

17) 朝日新聞2015年8月30日

18) 文部科学省の『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』より。

う教育理念の実現である。学生の流動性・多様性を促して異文化力・コミュニケーション力などを高めると同時に、幅広い体験を通じて、教室では学びにくい対人能力、判断力、柔軟性などを身に着けてほしいと考えている。単に国際社会で通用する人材というのではなく、多様な国籍や文化の人たちの中でリーダーとして活躍できる人材の育成を目指している。そのために『すべての学生に国際的な学習体験を提供する』という目標を掲げて、交換留学ばかりでなく、サマースクール、ボランティア、インターンシップなど多様な海外体験の機会を用意している¹⁹⁾と発言している。これは、文部科学省の日本人留学生を2020年までに12万人に倍増させ、同時に海外からの留学生を30万人に倍増させる計画の考えを反映しているように思える。大学も、より多くの学生を留学、ワーキング・ホリデー、海外インターンシップ体験等、様々な形で海外に行かせ、国際的な経験を積みせようと本格的に考え始めた。また、海外からの留学生獲得にも本腰を入れている。

3.3 大学のグローバル化に向けての今後の課題

ここでは、日本の大学が交換留学プログラムを通して、海外からの留学生を受け入れる際の課題について述べてみたい。日本人の学生が、交換留学プログラムを利用して海外留学ができるように、欧米をはじめ世界中の大学と連携関係を構築・強化する取り組みを積極的に行っている大学も多い。交換留学プログラムの最大のメリットは、学生が在籍する大学で授業料を支払っている限り、留学先の授業料は原則免除されることである。しかも、世界のトップレベルの大学（協定校）に留学することも可能である。それでは、日本の大学は交換留学プログラムで、海外からの優秀な留学生を受け入れることができるだろうか。日本においても、英語で受講できる授業や英語による授業のみで学位が取得できるプログラムを設けている大学も珍しくはなくなってきているのは事実である。文部科学省も近年の国際化教育の取り組みとして、スーパーグローバル大学創成支援事業等で日本の大学をグローバル化に対応できるレベルに引き上げようと積極的である。

しかし、海外の大学は、日本の大学との交換留学プログラムを成功させるためには、英語で受講できるクラスが相当数設置されているか、更に授業の内容が充実しているかどうかを見極めるであろう。例えば、英語で受講できるクラスが設置されているとしても、外国人留学生のみが履修するクラスでは全く意味がない。日本人学生も一緒に履修してこそ、交換留学プログラムの意義がある。また、海外の大学の授業では、ディスカッションを積極的に取り入れている。日本の大学でも英語でのディスカッションの重要性は増してくると思うが、果たしてどのくらいの日本人学生が、外国人留学生たちと対等に自分の意見を英語で主張できるだろうか。授業以外のことでも重要なことがある。外国人留学生が日本人学生と交流できる活動やイベントを設けることも必要であり、更に、外国人留学生と日本人学生が交流できる学生寮を設置することも必要であろう。

日本の大学が、留学生に対し英語で受講できる授業を設けるためには、適切な教員の配置、カリキュラム・教材の開発、学習環境の整備などもしなければならない。海外からの留学生が増加すると、彼らを様々な面でサポートする教職員もさらに必要となる。留学生の対応窓口は国際センター以外の複数の

19) 江川雅子。2014。「はじめに」江川雅子+東京大学教養学部教養教育高度化機構（編）『世界で働くプロフェッショナルが語る 東大のグローバル人材講義』東京：東京大学出版会 iv頁。

部署にも及ぶことが考えられる。日本の大学で留学生の対応に、どれだけの大学教職員を準備しているであろうか。特に、日本の大学職員に対する研修はまだまだ不十分である。大学は、大学のグローバル化にあたって、上記のような様々な問題を克服していくことが、今後の課題となろう。

3.4 グローバ人材とは

エアン・ショー (2014) はグローバル人材になるために必要な6つの要素として、「第1に、リーダーシップ、第2に 他者からの評価（自分が知っている人のうち、誰が自分を高く評価してくれるか）、第3に、豊富な経験、第4に専門性、第5にローカルコンテキスト（その地域特有のしきたりや思考・行動の様式）に適應する力、最後に、関係の構築（人と繋がり、人を繋げること）」²⁰⁾を挙げている。リーダーシップは文部科学省の言う「主体性・積極性」に、ローカルコンテキストは「異文化理解の精神」に相当すると考えられる。

では、グローバル人材になる条件で中心となるもののうち、「総合的な語学力」²¹⁾と「専門分野の知識」の重要性について考えてみたい。「英語を読む・書く能力重視の原点」で、「経済関係の分野」について例をあげたので、ここでは二つの違う分野について、例を挙げて説明する。一つは、スポーツの分野についてである。日本人のプロ野球選手がアメリカのメジャーリーグで、プロサッカー選手がヨーロッパのクラブで活躍し、プロテニス選手、プロゴルファーが世界の大会で活躍する時代になった。英語でインタビューを受け、記者会見では英語で応答できる選手も現れた。まさにスポーツのグローバル化時代の到来である。また、オリンピックなどで活躍した選手が引退し、指導者となり、様々な経験を積んで、その競技の世界組織の理事・役員などに就任することもあるだろう。また、日本を代表して、その競技の国際会議に出席する人も出てくるだろう。この場合、そのスポーツについての「実践と理論という専門知識」はすでに身に付けていることになる。後は、総合的な語学力になる。「話す」ことはもちろん、膨大な資料などを英語で読み、英文の報告書などを書く必要も出てくる。また、各方面の人たちとメールなどで、英語でコミュニケーションを取ることも増えるだろう。このように、「読む力・書く力」が「話す力」と同等に重要になってくる。世界の競技団体の理事・役員になるということは、その競技の様々な最新情報（ルール改正等）をいち早く得ることができ、また、日本の主張も発信することもできるので、非常に大切なことである。また、一般のスポーツ選手でも、国際大会に出場し、外国の選手とメールなどでコミュニケーションが出来る時代になってきている。スポーツを通して日本と海外との架け橋になれる交流ができ、例え競技から引退し、別の世界に飛び込んだとしても、この経験は大いに役立つことは明らかである。

次に、科学の専門分野について述べてみたい。科学者（科学が専門分野）が英語で執筆した論文を海外の主要な科学雑誌に投稿する場合がある。これは外国人に論文を読んでもらい、世界中の科学者からそ

20) エアン・ショー. 2014. 「グローバル人材になる6つの条件」江川雅子+東京大学教養学部教養教育高度化機構 (編) 『世界で働くプロフェッショナルが語る 東大のグローバル人材講義』東京: 東京大学出版会. 160-164頁.

21) 「総合的語学力」の「総合的」とは、「話す、聞く、読む、書く」の4技能を総合的に学ぶことを指す。「語学力」とは、「英語のみならず、フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語等の語学力」を指すが、本稿では「英語」とした.

の論文の評価を得たいために、英語で論文を執筆する訳である。その論文が認められた場合、世界中から大きな注目を浴びることになるだろう。しかし、いくら素晴らしい論文でも日本語で書いた場合には、外国人には読んでもらえないことになる。「英語で書く」ことの最大の利点は、外国人に読んでももらえることなのである。なぜならば、英語は世界の共通語だからである。「話す」ことはコミュニケーションの主要な一つだが、「書く」こともコミュニケーションの一つなのである。同様に、英語で書かれた論文を読みこなす「読む能力」も合わせて必要になってくる。また、学会等で、英語で発表することもあるだろう。だから、「科学者は英語ができる」とよく言われる。また、科学者は海外の大学に留学、あるいは、研究員として若い時から外国で暮らしている経験（文部科学省の言う異文化理解の精神にも当てはまる）も多いので、グローバル人材になる要素を兼ね備えていると思われる。スポーツと科学の分野について例をあげて説明してきたが、他の分野でも同じことが言える。「総合的な語学力」と「専門分野の知識」に、「リーダーシップ」、「様々な経験」、「適応力」、「人との繋がり」、「異文化理解」等を身に付けることが、グローバル人材になりうるのであろう。

4. 大学の英語教育における Writing の問題点について

筆者が今まで大学英語教育において、「英語を読む・書く能力」の重要性について色々述べてきたが、実際に大学で担当しているビジネス英語関係の授業を通して、Writing の問題点について考えてみたい。その理由として、「Writing の授業」が大学の英語科目（Speaking, Listening, Reading）の中で一番疎かにされているのではないかと思ったからである。

人とのコミュニケーションは先に述べたように、「話す」ことによって成立するが、メールなどを使用して、「英文を書く」ことによってもコミュニケーションが成立するわけである。地球規模でどこにいても瞬時にコミュニケーションができる時代になった。従って、「書く能力」は以前と比べてはるかに重要になってきている。しかし、日常英会話ができ、TOEICで900点以上を取得した学生でも、ビジネス英文メールすら満足に書けないのが実情である。Writing の基本を十分に習得していないことに、その原因があると思われる。

例えば、“1) Think in English. 2) Choose your subject carefully. 3) Write clearly and simply. 4) Be definite, specific, and concrete in your writing. 5) Remember the active voice is more direct and effective than the passive voice in English. 6) A positive statement is more effective than a negative statement. 7) Express parallel ideas in parallel form. 8) Do not mix verb tenses in a paragraph. 9) Remember that the position of words in a sentence is important. 10) Watch your spelling. A spelling mistake is unforgivable for a college student. 11) Always write complete sentences. 12) Write and rewrite, again and again. A good paper can never be written on the first draft.”²²⁾ のような Writing の基本を十分に理解していない学生が多いことである。「スペルには気をつけなさい。大学生にとってスペルミスは許されるものではない」という上記項目10)があるが、学生に練習問題を書かせるが、必ずスペルミスをする学生が出てくる。これは、辞書で確認するという習慣の

22) 筆者が大学生の時、英作文の授業で外国人教員が作成した小冊子 *ENGLISH COMPOSITION OUTLINE AND INSTRUCTION BOOKLET, Revised Edition* から引用した。内容がよいので、現在でも愛用している。

欠如からくるものかもしれない。

「繰り返し、繰り返し、書き直しなさい。最初の草稿でよい英文は決して書けるものではない」という上記項目12)は、筆者が最も参考している点で、学生にとっては耳が痛いことだと思うが、現在の学生にとって一番欠けている点であると思う。ここで、アメリカのノーベル文学賞受賞者(1954年)であるアーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway 1899-1961)について触れてみたい。「武器よさらば」(*A Farewell to Arms*)を書き上げた時に、最終章(第41章)の最終ページは満足するまで書き直したと言われている。次の英文が最終ページの最後の一節である。「武器よさらば」はヘミングウェイの“hard-boiled”²³⁾の文体で書かれた、代表的な作品である。

“But after I had got them out and shut the door and turned off the light it wasn’t any good. It was like saying good-by to a statue. After a while I went out and left the hospital and walked back to the hotel in the rain.”²⁴⁾

学生も英文を書く時に、「繰り返し、繰り返し、書き直す」ということを銘記しておくべきである。こういう習慣をつければ、よい英文を書けるようになることは明らかである。

次に、“1) Period (.) 2) Question Mark (?) 3) Exclamation Mark (!) 4) Dash (—) 5) Hyphen (-) 6) Apostrophe (‘) 7) Comma (,) 8) Semicolon (;) 9) Colon (:) 10) Quotation Marks (“ ”) ”と言った句読点の用法も十分に理解していない学生が多く見られる。例えば、ビジネ英文レターのInside Addressの書き方においても、下記のように適当にComma(カンマ)を使用、或いはPeriod(ピリオド)を省略する例が多くみられる。

Mr. Donald White, President,
Milwaukee Trading Inc
49 Tenth Street,
Milwaukee, WI ,53051
U.S.A.²⁵⁾

また、下記の英文のように、Commaについても適当に、或いは無意識につけたりしている学生が多い。

We can promise delivery before October 10, if we receive your order within 10 days.²⁶⁾

23) hard-boiled の文体とは、「美しい、悲しい」などの形容詞等の余計な語(句)は使用せず、カメラのレンズを通して見たように客観的に、かつ単文を“and, but”などの接続詞を用いて簡潔に描いたヘミングウェイ独特の文体である。従って、上記の英文も個人的な感情は描かれていないが、主人公(私)の気持ちは十分に理解できる。

24) Ernest Hemingway. 1957. *A Farewell to Arms*. 332 頁. ニューヨーク: Charles Scribner’s Sons.

25) 海老沢達郎. 2007. 『Business Writing 英文ビジネスレター入門』11頁. 東京: 金星堂.

26) 同上. 57頁.

もし上記のようにCommaをつけたならば、アメリカの語学学校のWritingの授業では、“No comma is needed when the main clause is before the dependent (if) clause.”²⁷⁾ というコメントが恐らく答案用紙に書き込まれるであろう。同様に、文末にperiodを単に忘れた場合でも、“A period was added at the end of sentence.”と指摘されるであろう。

Semicolon, Colonの使い方も指導しているが、下記の英文になると、3)を除いては、学生は理解するのが困難な状況にあると言ってもよいだろう。

- 1) We thank you for your offer of May 30 regarding the California wine at \$59.00 per case for California Classic Rose; \$67.95 per case for Johannisberg Riesling; and \$74.97 per case for Lachryma Red , FOB San Francisco.²⁸⁾
- 2) The management objected to the labor union’s proposal of a 10% summer bonus increase; consequently, the negotiations broke down.
- 3) We offer you firm the following goods subject to your reply reaching us by September 25:²⁹⁾

同様に、英文を書く上で非常に重要である「英文法」についての基本も十分に理解出来ていない学生が多くみられることも事実である。ただ、授業を通して、非常に興味ある事実を発見した。それは、学生は関係代名詞を好んで使用するということである。筆者は短い文では、できるだけ関係代名詞は使用しないで英文を書くよう指導している。例えば、「東京電器株式会社は日本を代表する家電メーカーです」を英文にする場合、学生は殆ど「日本を代表するところの家電メーカー」というように関係代名詞を使用する傾向にある。ただ、これは学生だけに限らないことが分かった。筆者は獨協大学のオープンカレッジで、一般社会人に「実践！ 英文ライティング入門」という講座を担当しているが、一般社会人も関係代名詞をよく使用する傾向にある。筆者の模範解答では、“The Tokyo Electric Corporation is a leading home appliance manufacturer in Japan.”と関係代名詞は使用しない。簡潔に書くことがビジネス英文Writingでは求められているからである。また、英語メディア文等を十分に読みこなしていない事も、その原因と言えるのではなかろうか。従って、関係代名詞を使用しないで英文を作成できるかどうか、即ち日本語の構造と英文の構造は違うので、その辺を色々考えて英文を作成することも、Writing上達の道に繋がるのは明らかなことである。

何故、筆者がこのようにWritingの基本にこだわるかについては、「何事においても基本がしっかり出来ていなければ、物事は上達しないからである」という考えに基づいているからである。Speakingについては、とにかく話すことが大切であり、Readingについては、日本人の得意とする分野なので、ある程度基本が出来ている。これに比べて、Writingは、大学の入学試験でも、完全な形での和文英訳は殆ど出題されていない状況である。従って、Writingの勉強が疎かにされ、Writingの基本が欠如していると考える。大学の英語教育において、もう一度Writing（英語で書く）について考えてみる必要がある

27) ただし、長い複雑な文章の場合は、Commaをつけることによって意味が分かりやすくなることもある。言い換えれば、こういうことも考慮してCommaをつけるかどうかを考える必要がある。

28) 海老沢達郎。2007.『Business Writing 英文ビジネスライター入門』61頁。東京:金星堂。

29) 同上、57頁。

るのではなからうか。

5. おわりに

今まで「英語を読む・書く能力の重要性」について述べてきたが、言い換えれば、「英語を読む・書く能力の重要性」とは、「話す・聞く・読む・書く」の4技能を含む総合的な英語学習のことと考えてもよい。なぜならば、「はじめに」で述べたように、**Speaking**（話す）の重要性は誰もが認めているからである。従って、「英語を読む・書く能力重視の原点」で述べたように、「英語で読み、英語でレポートを書き、英語で発表をする」ということがグローバル化された大学の英語ではないかと思う。これを裏付ける資料がある。英国の教育誌タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）が2015年の世界の大学ランキングを公表した。日本の大学では、東京大学が43位（2014年は23位）、京都大学が88位（2014年59位）で、200位以内は、この2校だけである。2014年の大学ランキングで、141位であった東京工業大学、157位であった大阪大学、165位であった東北大学は、2015年の大学ランキングではそれぞれ200位以下となった。政府は大学ランキング上位校の増加を目指しているにもかかわらず、東京大学も去年のアジアの首位からシンガポール国立大学（26位）、北京大学（42位）に抜かれ3位になった。日本の大学がランキングを落とした理由の一つとして、「従来より英語論文が重視される方法に変わった」³⁰⁾ということである。筆者が今まで述べてきたように、「英語で書く能力」が、大学のグローバル化にとって必須の条件になってきたようである。つまり、今後の大学の英語教育において、「話す・聞く・読む・書く」の4技能を総合的にうまく結びつけることが肝要となるであろう。そうすることによって、英語教育面において大学がグローバル化したことになるのである。

参考文献

（脚注で記した文献は省略）

- 海老沢達郎. 1987. 「特集 教師に望まれる英語力 望まれる読む領域の運用力」『英語教育』第36巻 第1号.
- 海老沢達郎. 1988. 「英語メディアにみる日米間の諸問題（11）日本の大国意識」『英語教育』第36巻 第14号.
- 海老沢達郎. 1988. 「英語メディアにみる日米間の諸問題（12）日本の国内問題と米国の双子の赤字」『英語教育』第36巻 第15号.
- 海老沢達郎. 1988. 「パーセプション・ギャップを中心にして見た日米経済・貿易摩擦問題」日本時事英語学会（編）『日米情報摩擦 英語マスメディアに見る経済紛争』東京：大修館書店.
- 雨宮剛・海老沢達郎・金谷良夫・佐川和茂（編著）. 1983. *A Handbook of English Composition*. 東京：青学出版.
- 海老沢達郎・功力義雄. 2014. *English for Business*. 東京：DTP出版.
- 中谷義和・柳原克行（訳）. 2003. 『グローバル化と反グローバル化』東京：日本経済評論社.（ヘルド, D & A. マッグルー著）.
- 大分大学経済学部（編）. 2008. 『グローバル化する経済と社会』京都：ミネルヴァ書房.
- 滝田賢治（訳）. 2010. 『グローバリゼーションと国際関係理論』東京：中央大学出版部.（クラーク, イア

30) 朝日新聞2015年10月22日

海老沢 達 郎

ン著).

Himstreet, W. W. Baty & C. Lehman. 1993. *Business Communications*. ベルモント: Wadsworth Publishing Company.

教育再生実行会議. 2013. 『これからの大学教育等の在り方について』(第三次提言)

朝日新聞 2015年8月29日

朝日新聞 2015年9月23日

朝日新聞 2015年10月22日



海老沢 達郎 (Ebisawa Tatsuo)

所属: 獨協大学外国語学部交流文化学科非常勤講師

専門: 国際コミュニケーション

Email: sa42428@ya2.so-net.ne.jp